

6月15日(水)

本年度第44回(通算2590回)12時30分～ 釧路プリンスホテル

『会員卓話 私の職業パート4』

担当/プログラム委員会

☆お客様と来訪ロータリアン

☆メイクアップ

6月14日	小松亮次君	釧路ベイRC
-------	-------	--------

☆出席報告【会員総数65名 免除11名 出席計算に用いた会員数65名】

5月18日例会	出席及びメーカー数	42名	出席率64.6%
5月25日例会	出席及びメーカー数	43名	出席率66.1%

☆ニコニコ献金(今年度累計 677,000円)

- ・一年の責任を果たすのもあと3回となりました
 - ・あと3回です・・・
 - ・結婚記念日の花束ありがとうございました
 - ・久しぶりのニコニコです
 - ・中嶋さん平澤さん卓話宜しくお願ひします
 - ・結婚記念日の花束ありがとうございました
 - ・誕生日です。後期高齢者です
- 三原克也君
泰地浩幸君
村井順一君
迫田 武君
石井東洋彦君
平澤利秀君
小松亮次君

☆会長挨拶

みなさんこんにちは。6月5日(日)、今年度2回目の野遊会も天候に恵まれ、多数の会員家族の皆さんの参加をいただき、楽しいひと時を過ごさせていただき無事終了を致しました。ご準備いただき家族親睦委員会の皆様には、心から感謝とお礼を申し上げます。

今年度の例会も残すところ今日を含め3回となりました。私も泰地幹事も1年間の責任を果たすのもあとわずかという気持ちでいっぱいです。私自身にとりましても、貴重な経験をさせていただいて忘れることのない1年間になることと思います。

先週、最終の第7分区会長幹事会が開催されました。分区としての事業は本月19日のIMを残すのみとなりました。内容も東日本大震災に伴い、地震・津波被害から身を守るというテーマで、地域の防災について佐々木信裕釧路市防災危機管理主幹よりご講演をいただきます。多くの会員の参加をお願いいたしまして会長挨拶と致します。

☆幹事報告

①本日の回覧は

- ・釧路西、東、南、ベイ、厚岸、浜中RC様よりプログラムの案内と会報
- ・ザ・ロータリアン
- ・釧路北RAC次年度第一例会参加のご案内 です

②ロータリーの友と月報をメールBOXに入れました。ご確認をお願いします。

ロータリーの友の27PにIDスポーツ大会の記事が記載されております。

③6月19日(日)13:00～ 釧路全日空ホテルにてIMがあります。

④6月12日に第4回パークゴルフ大会に三原会長と泰地の2名で参加してきました

★平澤利秀 君

私の会社は、西港石油㈱です。職業分類で言うと、石油製品の小売業になります。簡単に言うとガソリンスタンドです。

自動車・トラックへの燃料等(ガソリン・軽油)のスタンドでの提供、重機・船などへの燃料の配達、一般家庭・ビル・学校施設への暖房用燃料(灯油・A重油)の配達・販売が主な仕事になります。

その他としては、自動車に係る部品・タイヤの販売、暖房用のストーブの販売、分解修理などにたずさわっていますが、売り上げの90%以上は、燃料の販売となっております。

昨年末の話になりますが、皆様のところにも通知させて頂きましたが、親会社でもある、㈱丸平という会社の代表も兼任する事にもなりました。この㈱丸平という会社は、主な仕事は油の卸売販売です。もともとのスタートは、木材の製材、販売、建て売りなどでした。この後に控えております中嶋パスト会長の会社と同業者であったとも聞いておりましたが、私が戻ってきた時にはすでに、現在の油屋になっておりました。

さて、現在の石油業界の現状を少しお話したいと思います。

【自動車を取り巻く環境】と致しまして、1769年にスチームエンジンを搭載した世界で最初の自動車が発明されてから現在に至るまで、自動車の動力源はガソリン・軽油が主役でありましたが、ここに来て『脱石油』という方向性から、バイオ燃料・天然ガス・電気・水素などを自動車の燃料に適用する研究・開発が加速しており、一方で自動車メーカー側も低燃費車・「ハイブリット車(HV)」の開発もすでに実用化されており、原価価格の上昇と合わさっての販売量の減少、価格競争によります収益の悪化と大変厳しい現状である事は間違いないところだ。

今後ますます増えてくるであろう電気自動車(EV)、燃料電池自動車(FCV)に適用する技術が格段に進歩したことを受け、石油業界としても今まで自動車への供給拠点として、それまで支えてきた実績をふまえても、今後も『次世代自動車』に対して、エネルギーの供給にたずさわっていくのか?いやいかないのか?という分岐点に来ていると思われま。

現在の段階では、そうした自動車に対して採算が見込めるビジネスモデルではなく、言い換えればエネルギー供給業者だけの力では構築できるものではなく、自動車産業との協力や行政のリーダーシップによる、新たな制度・仕組みづくりが必須であることも事実です。

簡単に言うと、業界としての見通しは暗いという事です……。

ここからの話はあくまで自論ではありますが、たとえ『次世代自動車』の普及が進んでも、現在日本で走っている自動車・トラック等が全てEV、FCVといった車に代わるまでには、間違いなく私の世代ではないでしょうから、今後も細々と、あと20年出来ればと小さな目標に向かってやっているといるところです。

そして次に、『自動車用燃料』ともう一つの柱であります『暖房用燃料』についてですが、木材・石炭の時代から、今は灯油・重油にシフトしています。しかし、ここ数年はオール電化、オールガスの家庭・建物が増えているのも事実です。元来、灯油はすぐれた品質と経済性から、暖房用燃料として高いシェアを維持してきました。特に北海道・東北までの寒さの厳しい地域では、8割近くを占めているとされていますが、今後は太陽光パネルの発達、電気、ガスなどの他のエネルギーと競争になり、我々、石油販売業者には、厳しい時代が予想されますが、しっかりと地域に密着した安定経済に取り組んでいきたいと思っております。

業界の展望的には、明るい材料が全くといっていいほどないものですから、話せば話すほど暗い話になりますので、この辺で終わりにします。本日は、有り難うございました。

★中嶋嘉昭 君

例会において、自分の職業の話をするのは、新入会員卓話以来だと思っております。会社の沿革、厚岸で昭和一桁年から造材業(伐採)、昭和25年製材工場の中島木工場で運転を開始し住宅や造船、魚箱の製材を主力に生産販売していました。

昭和29年9月、洞爺丸台風により、森林が倒され風倒木処理で道内に木工場が増えられた。昭和42年8月、釧路村セチリ太に釧路工場開設し二工場体制で操業、昭和47年12月、中島木工場を閉鎖して釧路工場へ統合、社名を株式会社中嶋木材として現在に至っており、平成3年末で工場を閉鎖し、製材の仕入れ販売と建材を手がけております。私自身は、昭和44年4月に厚岸中島木工場へ入社、昭和46年8月(株)中嶋木材釧路工場の役員、昭和48年1月の工場統合で、(株)中嶋木材代表取締役として就任し、現在に至っています。

今回は、製材生産の流れ、住宅建築と木材の乾燥について話したと思います。現在は大きく改善されていますが、住宅産業は「クレーム産業」と言われて久しいものです。施工のミス、技術の未熟さ、作業工程など、複合的クレームもあり、原因を突き詰めると、製材に辿り着き、その主因は、乾燥によるものです。ひと昔は、工務店や大工さんが製材を備蓄して自然乾燥、半年、一年後使い回しをして、大きな欠点はなかったが、近年は備蓄する余裕もなく、生材に近い物を使用した事による。そこで強制的に乾燥する、機械による人工乾燥技術が開発され、自然乾燥と併用されています。しかし「天乾に勝る乾燥なし」という言葉がある通り、自然が一番だという事です。

製材の販売先は、住宅建築、土木、魚箱、パレット、梱包材、測量、工芸看板などあらゆる業種に使用され、おが屑、パークは酪農家に使われています。ただ公共工事の減少、土木の需要減、漁獲減や発泡スチロールへのシフトで魚箱減、パレットのプラスチック化と、あらゆる分野で需要が減少、他の部材に変更、市場が狭くなっております。今後は、全くゼロにはならないでしょうが、微減状況で進むものと思われまますが、木材の良さがあらゆる方面で認められて、需要が伸びることも期待するところもあります。それは、集成材の進化により、長いスパンの部材がとれ、大断面のものが出来て、鉄骨やRCに十分対抗できるようになってきたからであります。

次に、プレカットについて触れます。

プレカットとは、住宅建築における木工事部分の主要部を、現場施工前に工場加工をする事。私も16・7年前にプレカット事業を検討した事がありますが、先輩会員から「やらない方がいいよ」と言われ、どれ位の需要が見込めるかなど、色々模索したものの断念したことがあります。今思えば、その先輩の言葉は重かったなと受け止めており、感謝もしております。プレカット専用生産システムの全自動化や大工職人の減少などを背景に、1990年頃より急速に普及し、木造軸組住宅(在来工法)のプレハブ化を促した。いまでは、プレカット率は100%に近くあり住宅建設の主流となっている。この他の木造住宅の工業化の手法としてツーバイフォー工法(木造枠組壁工法)がある。

住宅の工業化や各工法のメリット、デメリットがあります。

在来工法の技術の伝承が失われつつあると危惧しています。木材の加工は大工さんが細工場(工場、作業所)で、「木取り」を考え「墨付け」をして「仕口・継ぎ手」の加工、切り込みをして、現場で建てる、技術と経験が必要とされ、師弟制度に支えられて伝承してきました。

木材の供給においても、大きく変化をしてきております。木材の質の低下、材種の枯渇、径級が細くなり、無垢材で全てを賄う事が困難となり、特に主要な柱、横架材は欠点の克服による、クレームのリスク軽減を求めて、集成材に頼っている現状であります。今後更に、羽柄材にも集成材使用は普及していくものと思われま。北海道の場合、戦後、寒冷地に強く、成長の良いという事で、急速に拡大植林されたカラ松と、住宅建築でどの様に付き合っていくが将来的な課題である。

「木の文化」の日本から、木材(製材)の需要が無くなることはありません。

「木の良さ」が、日本人の心に肌に、遺伝子として染み付いている為であると理解しています。「通気性、落ち着き感、暖かさ、軟らかさ、木目の美しさ、健康的」など、多方面に活用されており、資材として無駄なく利用されている。

森林は、環境林として保護育成されている森もあり、収穫まで息が長いとは言え、経済林として伐採し、植林し、育林していく循環林として利用されてもおります。木材の重要な機能として、再生が可能であり、未来永劫に資源として利用が出来ること。地球温暖化防止の温室効果ガスの吸収源として見直され、京都會議では、二酸化炭素削減目標6%のうち3.8%を森林に頼るとい、過大な期待をされております。